

韓国戒壇と仏塔における相関関係の研究

李 鎮 榮

本研究は、道宣が667年に執筆した『戒壇図経』と、それに基づいて新羅僧慈蔵が7世紀に創建した通度寺戒壇が、後世の戒壇と仏塔に与えた影響を解明することを目的とする。『戒壇図経』において「舍利を安置した戒壇は仏塔に等しい」とする、戒壇の建立目的は、諸守護尊を安置する「石造正方形上下基壇」の四面に設けた階段から覆鉢型舍利塔へ登り、釈迦を象徴する舍利塔へ礼拝し、その前で受戒儀礼を実践することである。同構造は、インド・ガンダーラ地域に源流が求められる「覆鉢」型の仏塔（ストゥーパ）と同様である。おそらく、道宣が戒壇を仏塔と見なしたのは、彼の師匠・智首が双塔で受戒した事実や、彼自身が現場で仏塔などを調査したことになみ、インドの戒壇を参考にしながらも、仏塔の構造を戒壇にそのまま取り入れたと想定できる。これまで、戒壇の研究は蓄積が乏しく、さらに戒壇と仏塔の相関関係の研究はさほどない現状で、本研究は韓国における戒壇と仏塔における相関関係の研究である。

このような趣旨から、本研究の結果の要旨をまとめると次の通りである。

- ① 667年に道宣により成立した『戒壇図経』や『祇園図経』には、インドに源流を求める戒壇に関して詳細に記述されている。これらの文献と韓国の通度寺戒壇をはじめとする戒壇と仏塔を比較した結果、同文献における戒壇の構造や法量は、様々な守護尊などの諸尊を安置した石造正方形基壇を持つ、仏塔をそのまま取り入れたものと判明した。
- ② 7世紀創建の通度寺戒壇は、『戒壇図経』と比較検討した結果、従来の説の通り、同経典に基づいていることが改めて確認できた。もっとも、従来の研究では、同戒壇について、仏教学からのものが多く、美術史的な観点からの研究はあまり進んでおらず、戒壇の年代についても、様々な被害により修理があった後世の高麗～朝鮮時代のもの（後補）と位置付けて

いることが現状である。しかし、本研究では、同戒壇の基壇と下層基壇四隅に安置されている護塔神について研究した結果、創建当初の7世紀の様式とそれに矛盾しない様式が持つ像が少なからず含まれていることが認められた。このことから、後世の戒壇と仏塔に影響を及ぼしたと考察できる同戒壇は、道宣が『戒壇図経』を完成した際の浄業寺戒壇など、創建当初の戒壇がほぼ伝来しない現状にあっては、東アジア戒壇の復元において最も重要な作例の一つとして位置付けられる。その他に、統一新羅の大和寺舍利塔や金山寺戒壇や、高麗時代の仏日寺戒壇においても、『戒壇図経』及び通度寺戒壇の規範に基づいていることが明らかになった点は、大きな成果である。

- ③ 7世紀後半の統一新羅初期の四天王寺（670年着工）双塔基壇の守護尊安置や、二重基壇を持つ感恩寺東西塔とそれぞれに奉安された2基の戒壇型舍利容器の出現は、『戒壇図経』や通度寺戒壇の構造・意味と共通することからその影響が考察できた。すなわち、このような作例は、戒壇と仏塔における相関関係を解明する上で極めて重要なものである。また、8世紀の遠願寺址石塔においては、初層に四天王と基壇に十二支像を配置した構造は『大集経』の守護尊を引用した『戒壇図経』と通度寺戒壇に基づいていることを指摘した。さらに、統一新羅時代の遺跡である靈巖寺址には、獅子と迦陵頻伽、龍で荘厳した石造正方形構造の金堂が伝来する。このような、同遺跡の金堂は『戒壇図経』や通度寺戒壇及び、仏塔と比較すると、構造と法量において多数の共通点が認められることから、戒壇やそれに準じる役割を果たした蓋然性が考察できた。